

生きた細胞 超低温で輸送



整水器メーカー日本トリムの子会社で、将来の病気に備えた「さい帯血バンク」を運営するステムセル研究所（東京）は、生きた細胞や血液の検体をマイナス190度前後の超低温下で安全に輸送・保管するサービスに乗り出す。従来は医師の手で直接運ぶ必要があり、病院でも特別な設備での保管が求められた。新サービスの提供で、医師や医療機関の負担軽減に貢献する。

悪性リンパ腫など一部の血液疾患の治療では、骨髓細胞や末梢血まつしやくちの移植が有効だ。提供者から採取した

日本トリム子会社 医師の負担軽減

検体を移動させる際は、超低温の状態での慎重な取り扱いや、厳格な履歴管理が不可欠となる。

ステムセル研究所では、凍結したさい帯血の輸送・保管サービスで培ったノウハウを応用する。検体を液化窒素入りの特殊容器（ドライシッパー）に写真、同社提供に収納し、マイナス190度前後を維持しながら輸送する。価格は輸送1回あたり税込み9万9000円。他社のサービスより約2割安いという。患者の転院や、医師の異動などに伴う検体の輸送を想定している。

研究所は1999年の設立。組織や臓器の再生医療などを利用する場合に備えて、へその緒や胎盤から採取したさい帯血を、本人や家族のために凍結保管する。今年3月末時点の保管実績は約6万人分に上り、民間バンクとしては国内最大となる。